

平成 29 年度愛知県スモン患者検診における血液・尿検査

鷲見 幸彦 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 副院長室)
新畑 豊 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
武田 章敬 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
堀部賢太郎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
山岡 朗子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
辻本 昌史 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
中野 真禎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)
河合多喜子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 神経内科)

研究要旨

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など、患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。

対象は平成 29 年度愛知県スモン患者集団検診を受診した 13 名 (男性 4 名、女性 9 名)。年齢は 63 歳から 96 歳 (平均 80.8 歳)。対象地区は名古屋・尾張・知多地区 (名古屋、春日井、瀬戸、尾張旭、一宮、稲沢、津島、北名古屋、江南、犬山、小牧、大府、半田、東海、常滑、知多等)。10 名は検診会場で 3 名は自宅で採血を行った。血液検査 (血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)、尿検査 (定性) を 13 名全員に実施した。本年度は別研究の遺伝子用採血を同時に採血したため、採血量を増やさないよう骨粗鬆症検査は行わなかった。平成 29 年度の結果は正常 2 名、軽微な異常 5 名、軽度の異常 3 名で、中等度の異常 1 名および高度の異常 2 名であり、医師の経過観察が必要と考えられる受診者の全体に対する比率は 38% であった。11 名が平成 27 年度に受診しており、経過を観察できたため前回との比較を行った。個々の患者の経年的変化では改善が 1 名、不変が 10 名であった。

A. 研究目的

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。

で採血を行った。血液検査 (血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)、尿検査 (定性) を 11 名全員に実施した。本年度は別研究の遺伝子用採血を同時に採血したため、採血量を増やさないよう骨粗鬆症検査は行わなかった。内容は表 1 に示す。

B. 方法

対象は、平成 29 年度愛知県スモン患者集団検診を受診した 13 名 (男性 4 名、女性 9 名)。年齢は 63 歳から 96 歳 (平均 80.8 歳)。対象地区は名古屋・尾張・知多地区 (名古屋、春日井、瀬戸、尾張旭、一宮、稲沢、津島、北名古屋、江南、犬山、小牧、大府、半田、東海、常滑、知多等)。10 名は検診会場で 3 名は自宅

表 1

血算：血算：白血球数、赤血球数、ヘモグロビン ヘマトクリット、血小板数
電解質：Na、K、Cl
肝機能：AST (GOT)、ALT (GPT)、ALP、LDH、ChE、 総蛋白、アルブミン、総ビリルビン、アミラーゼ
腎機能：尿素窒素、クレアチニン、尿酸
脂質：総コレステロール、中性脂肪、血糖、HbA1c

C. 研究結果

平成 29 年度の結果は正常 2 名、軽微な異常 5 名、軽度の異常 3 名で、中等度の異常 1 名および高度の異常 2 名であり、医師の経過観察が必要と考えられる受診者の全体に対する比率は 38%であった。11 名が平成 27 年度に受診しており、経過を観察できたため前回との比較を行った¹⁾ (図 1)。高度異常の原因は貧血と、腎機能低下が 1 例、低ナトリウム血症と低アルブミン血症が 1 例で、中等度の異常は HbA1c 上昇であった。低ナトリウム血症の例は 123 meq/dl であり、長期入院中の例で緊急性がある可能性があったため直接愛知県に電話連絡し、担当保健師に伝えた。その結果ナトリウムの少ない経管栄養が持続されていた。個々の患者の経年的変化では改善が 1 名、不変が 10 名であった。2006 年から 11 年間の経過を追えた例は 3 例あり、経過中、中等度の異常を呈した例があったが 2017 年度には全例軽度以下に改善していた (表 2)。

D. 考察

受診患者の減少と高齢化している患者の状況から、より頻回な検診を行うために、平成 25 年度から尾張地区と名古屋・知多地区を合同で検診を行っている。

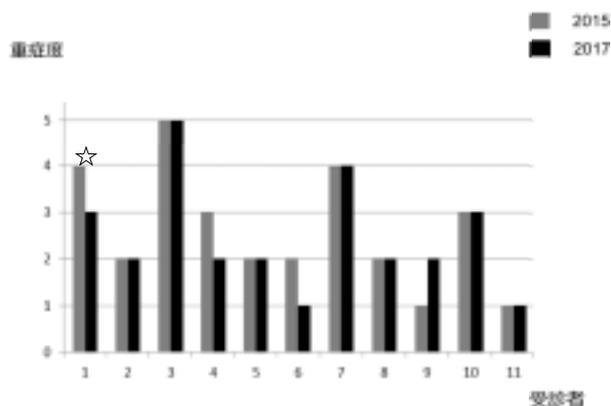


図 1 個々の検診者の経年的重症度変化
X 軸は検診者番号 Y 軸は重症度評価
グレーは 2015 年、黒は 2017 年 ☆は改善

表 2 2006 年から 11 年間継続して検診に参加できた 3 例の重症度変化

	2006	2009	2012	2015	2017
case 1	1	1	4	4	3
case 2	3	1	3	3	2
case 3	2	3	2	2	2

今回は尾張地区にある一宮市で検診を行ったため、遠方となる知多地区からの参加はなかった。2006 年以来毎回継続して検診を受けている患者が 3 名おり、一方初めて検診に参加された方が 2 名みられた。医師の経過観察が必要と考えられる軽度異常から高度異常の全体に対する比率は 38%と低かったが、高度が 2 名、中等度が 1 名おり、高度判定を受けた 1 名は異常な低ナトリウム血症があり、緊急性があるため、通常ルートでなく結果を受け取って即時に愛知県へ連絡した。訪問検診した 3 名の結果は、1 が 1 名、3 が 1 名、5 が 1 名とばらついており、訪問例が必ずしも重症ということではなかった。長期間検診を受けている患者は経過中、中等度程度の異常をきたすことはあっても改善していた。一方 2015 年検診で 5 の評価を受けた 2 名の受診者は、本年度は 1 名しか検診を受けることができていなかった。軽症者のみが受診できている可能性を示している。

E. 結論

1. 愛知県名古屋・尾張・知多地区のスモン患者を対象とした検診を行い血液・尿検査の異常について検討した。何らかの経過観察が必要と考えられる受診者の割合は 38%であった。
2. 今回は 2 年前、5 年前に受診しておらず久々の受診となった例が 2 名あった。3 名は 2006 年から連続 5 回受診していた。
3. この地域の個々の受診者 11 名の経年的変化を 2 年前と同一の患者で比較検討できた。改善は 1 名、悪化している例は 0 名であった。他の 10 名は変化なし (2 1、1 2 は変化なしと判定) で安定していた。また訪問例が必ずしも重症ということではなかった。
4. 2006 年から 11 年間の経過を追えた例は 3 例あり、経過中中等度の異常を呈した例は 1 例であったが 2017 年度には全例軽度以下となっていた。

I. 文献

- 1) 鷲見幸彦. 平成 27 年度スモン患者集団検診における血液・尿検査. スモンに関する調査研究 平成 27 年度総括・分担研究報告書. 129-131 2015